第30号　2019年 1 月

朝田教育財団だより30

公益財団法人 朝田教育財団　Asada Educational Foundation

謹　賀　新　年
―理事長就任10年を振り返ってー

理事長　松井　珍男子

〇新年あけましておめでとうございます。平成が終わり新しい年号がスタートする本年になりました。当財団の関係者の皆様にはご家族と共にすがすがしい新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。さて、今年は国民にとってどんな年になるのでしょうか。平和を願い災害の少ない安心安全な生活が出来ますように祈るばかりです。ことしは４月には統一地方選挙があり、７月には参議院議員選挙が行われます。そして10月には消費税の増税がいよいよ実行されると言われています。私どもはこれら我が国の政治に関わることに強い関心をもって、選挙には必ず参加して国民の意思をしっかりと示すことが大切だと存じます。安倍内閣は平和憲法の改正を年来の野望として実行しようとしています。沖縄県民の民意を無視しての辺野古の米軍基地工事の強行実施、「移民法制」の強行実施、どの政治局面を見ても国民無視の政治が横行しております。さらに官僚による様々な横暴ぶりを許すわけにはいきません。「財務省の公文書改ざん」「文科省幹部の医学部不正入学・接待汚職」「障碍者雇用率の水増しとデタラメ」「財務省次官のセクハラ事件」等々この現実をしっかりと見据えて、もうこれ以上の無茶な政治・行政をストップさせねばならないでしょう。人権を大切にする世論をさらに大きくしない限りこの政治状況は変わることはないでしょう。

〇小生が財団法人　朝田教育財団の理事に就任したのは2006年のことでした。京都市副市長を退任した年に今は亡き朝田善三事務局長から理事への就任依頼がありお受けすることと致しました。朝田学校の「劣等生」であった小生にとってお受けしてよいものかどうかと逡巡しましたが、ご恩のある朝田家の皆様からの就任依頼を重く受け止め就任させてもらうことと致しました。2009年に前理事長の城守昌二先生がご逝去されその後任として理事長に推挙されたのであります。この時も歴代理事長になられた錚々たる学者先生・行政マンのOBの皆さんの顔ぶれを見ながら少し気恥ずかしい思いを持ちながらの理事長就任でした。それから早10年が過ぎようとしております。

〇年頭に当たりこの10年間の当財団の主な歩みについて振り返っておきたいと存じます。財団の主目的であります「奨学事業」に

ついては創設以来74名に上る奨学生へ総額１億４千万円余りの奨学金の貸与を行ってきました。大学卒業後の奨学生の皆さんは公務員や学校の教師、一般企業などで社会の有能な一員として活躍し頑張っておられます。そして貸与した奨学金の返還率はほぼ100パーセントとなっています。またこの奨学金の原資となる「賛助金」は財団創設以来の総額で１億３千余万円に及んでいます。多くの皆様からの浄財を頂きこの財源をお支え頂いてきたのであります。改めて心から感謝申し上げる次第です。

○「研修・啓発および研究事業」については毎年７月の朝田善之助元理事長の生誕記念日に開催している「同和教育研修会」はすでに36回を数えることとなりました。テーマはその時期にふさわしい話題を取り上げてきました。昨年は「朝田善之助記念館」の開館を祈念して竹口 等常務理事の講演で「朝田善之助記念館開館にあたって」のお話を伺いました。一昨年には「部落差別解消法」について部落解放同盟中央本部・西島 藤彦書記長からご講演を賜りました。その時期にふさわしい、今の話題を取り上げて参りました。朝田善之助氏の生誕100年の記念講演会では今は亡き元内閣官房長官であられた野中 広務先生からお話を伺いました。野中先生からは同胞としてのカミングアウトがなされ、かつては部落解放運動と敵対関係にあった往時の朝田善之助元委員長への思いを語って頂きました。朝田善之助氏に対する限りない尊敬の念を語り、戦争体験を語り平和がいかに大切かを力説されました。毎年開催しているこの講演会によって、市民の皆様への同和問題・人権問題への啓発活動を展開しているところです。今後とも時宜に適した話題でこの啓発活動を展開していく所存です。

○財団関係の法律改正により、当財団では2013年４月から公益財団法人格を取ることとなりました。この法人格取得に当たっては事務局の皆さんの懸命な努力、更に弁護士であられる国府 泰道監事にご指導を頂き京都府から認可を得ることが出来ました。この公益法人格は賛助会員の皆様からのご寄付に対して税制上の優遇措置が得られることから大切なものであります。その後の財団運営で監督官庁である京都府への報告書の未提出という事態が判明し、関係者に多大なご迷惑をおかけしました。その後は報告書の提出など所要の措置を的確に実行しているところです。今後とも関係官庁にご迷惑をおかけすることのないよう着実な事務執行を行ってまいる所存です。

○当財団にとって長年の懸案であった「朝田善之助記念館」がようやく昨年の7月にオープンすることが出来ました。朝田善之助氏が亡くなられたのは1982年ですから没後36年の歴史を経ての完成でありました。この記念館建設に当たっては朝田家の皆様から多大なご支援を賜りました。左京区銀閣寺にある一等地の土地提供、多額の寄付金も頂きました。また賛助会員をはじめとする多くの支援者の皆様から浄財をお寄せいただきました。本紙面を借りて心からなる御礼を申し上げる次第です。この記念館には朝田善之助氏が収集保管されていた部落解放運動に関わる５万点に及ぶ資料・図書を所蔵しております。水平社創立時に関わる資料や戦後の部落解放運動の始動時の関係資料・「解放理論確立の歴史的過程」・国策樹立全国請願闘争やその後の同

和対策審議会答申・特別措置法制定など水平社から90余年に及ぶ闘いの歴史が分かる資料が閲覧していただけます。また狭山差別裁判反対闘争の様々な資料もそろっています。開館後半年余が経ちましたが、市民・運動関係者・行政マンの方々・研究者の皆様などにご活用いただいております。初代館長に就任していただきました井本 武美館長を中心に来館者に懇切丁寧に説明し、気持ちよくご利用頂けるよう対応をさせてもらっています。まだすべての資料・図書の整理が出来ていませんが、財団にかかわる多くの仲間の皆様のご協力を得て、早急によりご利用されやすい記念館にしてまいる所存です。どうぞ多くの関係者の皆様のご活用をお願いいたします。

○小生も昨年傘寿を迎え、昭和で50年・平成で30年の馬齢を重ねてきました。わが師であり人生の歩みを教わった大恩人である朝田善之助氏が亡くなられた年齢に達したのであります。歳と共に文章の作成や事案の論点整理、議論・討論の整理、粘り強く作業を行うことなどが困難となってきました。どんな組織にとってもガバナンスが大切だと言われますが、それを上手くできないということになってきています。「ここらでよかろうかいな」と言うのが今の私の心情です。「朝田善之助記念館」が完成し、運営が始まったこの時に若い人たちにバトンタッチしていくべき時が来たと感じています。「老害」を数多く見てきた一人として老兵は消え去るのみと考えました。どうか次代の方たちが財団運営を担ってほしいと存じます。

朝田善之助記念館　研修室に机・椅子が整備されました

去る11月８日、朝田家のご厚意で手配されていました机、椅子のセットが納入されました。

45㎝×210㎝の大型の机６台、それに合わせて、頑丈で大きめの椅子18脚。机には、前面にパネルを取り付けられ、椅子には明るい緑色の背もたれカバーと荷物置きネットを取り付けられています。会議や研修などがゆったりと行えるよう配慮されています。

11月９日、滋賀県草津市常盤地区同和教育推進協議会の皆さんが、研修で利用されました。

奨学生の集い 2016-4 学習会

「奨学生の集い　2016-4学習会」を2017年２月18日(土)、京都市下京いきいき市民活動センターにて開催し奨学生、その卒業生、財団役員の皆さんが集いました。奨学生の先輩にお話しいただきました。ここに上杉伸一さんのお話を掲載します。

先輩からのメッセージ

上　杉　伸　一

私の生きてきた中で、大学へ行って卒業して、今までのことをお話ししたいと思います。その中で、部落問題またはあらゆる差別問題について大学の方で学んで、福祉と世の中のこと、差別がどう絡んでいるのかお話しできたらなと考えています。

自己紹介させていただきます。上杉伸一と申します。47歳です。去年まで財団の奨学生だったんですけれど、なかなか若い人たちの中で勉強するのは大変でしたけどそれなりに充実した４年間でした。

出身は兵庫県尼崎市です。昔でいう高松、僕の小さいときでいう上ノ島、今の住所は南塚口町というのですけれど、そこの村の中で生まれました。30歳前まで尼崎から出たことはありませんでした。高校を出て、鉄工所に勤めました。１回大学に行くんですけどね、天六にあった関西大学の夜間に通っていたが、なかなか通学が難しくて、鉄工所での職人の仕事の方にだいぶのめり込んで、なかなか学校に行けなくて、職人１本でいこうかなと思い中退することになります。しばらくは鉄工所の方で勤務してなかなかいい製品を作る仕事があって、そちらの方で先輩職人の下で色々仕事を覚えてきたなと感じました。

その中で、女性と知り合い結婚するわけです。それなりに年齢が来たので結婚しました。今思えばそんな結婚やったと思います。２年、３年くらいで離婚することになるんですけれども。その辺が僕の人生の中の大きな転換の時ではないかと思います。

何となく学校行って、何となく仕事して、何となく過ごしてきた。なんとなく年齢が来て結婚して、なにがしか生活がうまくいかず、離婚するのですが、その中で一つの目標を持ったり、これから先のことを考えて生きていかなければならないなと思う時期でした。ここがターニングポイントだと思います。多分30才くらいの時です。

30才、再婚し差別に向き合う

体調を少し崩し、力仕事ができなくなり、鉄工所の方を退職することになるんですけども、その後、高槻市の病院に勤務することになりまして、そちらの方で、患者さんの送迎とか、注射器とか医療材料の仕入れ、各部署に持って行く払い出し、あとは医療事務、医療機器、建物管理の責任者としてそこで働くことになりました。

その中で今の嫁さんと知り合い再婚するわけです。嫁さんは東大阪の部落の中で生まれた在日韓国人三世で、なかなかの経歴の人と知り合うんですね。そこで彼女はシングルで、結婚せずに娘を産んで、僕と知り合ったときは３歳か４歳かな、再婚するのですけれど、在日韓国人が部落の人間と再婚して、そこに連れ子がいると、はじめてそこで差別問

題につきあたります。

再婚して、彼女と籍をいれるのに、彼女は韓国籍、僕は日本籍、彼女は本名を名乗っている。でも役所では僕の姓を名乗らなければいけない。住民票には下に本名がかっこ書きで書いてある。役所から送られてくる封書には必ず上杉と書いてある。会社からくる他のすべての封書には、本名で書いてある。ややこしいことになっているんです。彼女には子供がいるので、僕とは血のつながりがないので、戸籍上は養子縁組をしなければならない。それも、彼女の子供はシングルで生まれたので、子供は韓国籍、僕と養子縁組をするには、韓国からハングルで書いた戸籍を取り寄せ、いろいろとめんどくさいね。そんなところでいろいろなこと、人が体験しないことを体験するようなことになります。

その後、実子ができるわけですがね。実を言うと実子ができたから結婚するのですね。急いで結婚するのですが、それはそれでややこしい話になるんですが、下の子のお父さんが日本人なので、日本籍になるんです。役所から送られてくる児童手当とか封書は別に来るんです。上の子は別に来て、下の子は一通来るんです。それもややこしい。それも仕方ない。封書が来るたびになんだかなという気がします。そんなことをしなければいけない。同じ家にいるのに。なかなか面倒なことになっています。それがいやなことではないのですが、無駄なことをするなと思います。

患者・家族の相談を受ける中、社会福祉士の道へ

病院の勤務の中で、自分のキャラクターがそうなのか、僕にはよくわからないのですが、はじめは患者さんや家族さんから病院の悪口を聞かされました。愚痴ですよね。こんなことがあってね。こんなことされてね。親しげにごく世間話的に愚痴って話してくることが続いたのですけれども、そのうち、「これから親の看護をしなくてはならないようになるな」、「こういう病気で」と僕に世間話をのっけてきたりとかするようになるんですね。僕は材料を扱ったり、人を送迎したり、仕入れ先と折衝したりとかが僕の業務なので、患者さんや家族の話に乗れる立場じゃないし、まして知識もない。でも、そんなことがずっと続いて患者さんや家族さんと仲良くなるにつれて、せっかく自分の病気のこと、親の病気のこととか話してくれていることを感じて、どっかで答えてあげたいなという思いがだんだんと募ってくるのです。それはそれで、病院には医療ソーシャルワーカーといって、相談業務に就く職種、もしくはポジションがあるんですけど、当然うちの病院にもいたんですけど、そこには行かずになぜか僕のところに来る。僕は答えられない。

ところで、患者さんは言ってすっきりするかもわからないけども僕はだんだん悶々としてくるわけです。じゃ、そこで相談業務につけばいいじゃないか、勉強すればいいじゃないか、なぜそう思ったかは、わからないけれどもそんな仕事に就きたい、勉強したいという思いに変わっていきました。調べると病院の方で医療援助するところに、社会福祉士が患者さんの治療計画に関わると点数が算定できるということで、社会福祉士の資格を持った人を募集している。なくてもできるのですが、そういった思いがあったので、社会福祉士を取ろうということで、これが調べるとなかなか受験資格が厳しいです。

病院の相談業務の実務について、もしくは

専門学校に行って実習する。一番年月のちかいものは、もしくは僕の経験で早いのは、福祉系大学４年生で経験を得るというのが受験資格をとるのに一番近いので、じゃ大学へと短絡的に考えて勉強を始めるわけですね。でも家庭を持ちながらなかなか私立大学へは厳しいので国公立の方へ行かざるを得ないと考えると、この辺では阪大、京大、神大あとは大阪府立大学、京都府立大、大阪市立大学くらいしか通える範囲がない。公立しか行けないのでセンター試験受けなくてはいけない。５教科やらなくてはいけないということになると、高校をもう一回行かなくてはいけないくらい年月がかかると思いながら、なるべく早く通ればいいなと思い、勉強始めたらやっぱりもう一回高校行ったくらいの年数がかかるということになってしまって３年みっちりかかる。模擬試験で京都府立、大阪府立、大阪市立で合格が出たので、それじゃ何処にするかということで嫁さんに相談したら、勉強するという環境なら私は京都がいいと思う。京都は大学が多いこと、狭いわりには集中しているということで、教える側の競争もあるのではないかということがあって、嫁さんも京都の大学に行っていたので、多少はゆかりの地だったということで、学ぶのなら京都じゃないのということで、京都の大学に決めました。

大学では取りあえず奇異な目にさらされることが、まず一番始めに体験した辛いことです。こいつは誰や、何者なんやと、なんならどっかの予備校のスパイかという形で問題持って帰る奴かなぁと思われたりしました。

受験は大変でしたが、家にずっと居ることの後ろめたさ、情けなさかなぁ、それが一番受験期に辛かったですね。勉強することよりも、自分の身分が宙に浮いていると、浪人という立場でいわれればそうですけど、いわゆる大学受験失敗して19歳の子がする浪人と違う形で家にいているというのが、中々辛かったと今でも思います。

大学の日々、新しい学びを経験

京都府立大学に入ります。福祉社会学科に通っての大学生活は、前回は働きながら行っていたので、実感することは出来なかったのですが、この４年間は大学生のような感覚で通ったなぁと卒業してから実感してきます。クラブに入って、サークル入ってキャンパスライフという生活はないけれども、その専門の人から教えてもらうこと一つ一つが勉強したなと新鮮でしたし、聞いたことあるものでも、中身が想像出来てなかったこととか大学の教授・講師・助教授などに何かを教えてもらうというよりかは、こんな研究をしているという話を聞くことの新鮮さがこの４年間でよかったと思います。この研究をして、こんなことがあって世の中にはこういうことなんです。それぞれの先生の言うことに納得させられたり、自分の老後とは違ってちょっと対立してしまうこともあって、本当に大学に来るまでの勉強と受験に向けての勉強と違う。今勉強したいという人には大学は行くべき所だと、この年になって良かったという感想です。

大学へ行ってなんとか卒業できたんですけれど、やっぱり現役の４回生、３回生の皆さんと同じように就職活動ができないですね。それは就職の先生が、あいつは同等には扱わない。一回社会に出て戻ってきている人間に対して同じように接することが出来ないのかなぁと感じました。僕の場合はいわゆる一般的な就職活動はせずに、３回生、４回生過ご

して、自分で応募して、面接を繰り返しながら活動していたんですが４月には間に合わなくて、５月、６月と過ぎ、ちょっとこれは希望している相談員業務に就けないなと思いながらも、なんとかやっと７月１日から働く場所がありまして、当時目指していた病院での相談員ではないけれど、介護老人保健施設、いわゆる老健の相談員業務として就くことが出来ました。長くかかったけれども、目指していたところに就いて今やっと半年過ぎて慣れてきたのかなというのが現状です。

中学まで、部落問題と関わらない生活

次は部落差別の関わりなんですが、今の職場は地理的に部落と関わりがあるみたいです。

生まれたのは尼崎の部落です。再婚した今の嫁さんは東大阪の部落に住んでいた在日の人です。今住んでいるのは高槻の部落です。すべてたまたまです。

今働いている老人保健施設は住宅地の中にある、大きな敷地です。以前は屠殺場があったとのことです。住宅を抜けて施設の中に入る手前には屠殺、動物を鎮魂する碑が建っています。部落だと思います。ちょっと裏へ行くと団地があって、まさしく村の団地の様相をしています。何かしら縁があるんだなぁと思います。

子供の時ね、小学校に入る前かな、どこの部落にも子供会というのがあったんですけれども、４，５歳くらいから必ず行かされるんです。僕の姉なんかも声がかかって、来いと言われて行くのですけれども、行くと年齢がバラバラで集まっているので、僕なんかは恰好のカモになるんです。イジメとかではないのですが、戯れる？僕の記憶では高いところから突き落とされて痛い経験をしました。

部落の中で、部落の人たちが集うところで嫌な経験をして、それ以来行かない、関わらないですね。何回も何回も指導員のお兄さんが家に来ては１時間、２時間と僕を説得するんですが、頑として行かない。後に大人になってからその人と再会するのですが、そのときの話が出てきて今では笑い話ですが、小さいときは関わりませんでした。小学校の時も村の校区の学校なので、村の子は登校するときにゼッケンを付けて門の前に立たされる。４，５人お兄ちゃんらと同じように。狭山差別裁判のゼッケンを付ける意味もわからないし、それこそ回りの奴らは何しとんねんという目で見ている。それも１回やったらもう二度としないです。自分が部落に生まれたこと、子供会とか、青年部とかには僕は参加しない、関わらないということを、その頃は貫いていました。中学校に入って、部落の校区の学校で、在日の人たちも一緒になって差別問題について話をする部落委員会が存在するのですが、僕はそこへも行かない。その当時は行けない。関わってこなかったから、行けないという気持ちがあったのかなと今では思いますが、やっぱり関わらないと言うことを貫いていました。

時々同和問題について何かしら学級会みたいなことを催されて冊子が配られて、部落の起源はとか、今でも残っているとか、残っていないとか、そんな話を聞かされたり色んな話し合いをさせられたりするんですけれども、関わってこなかった事もあるんですけれども、この人たち一体何を言っているのだろうかなと教師のことを見ていました。何が分かっているのか、何が言いたいのかなと中学の時は思っていました。特に反抗期で尖っていたわけでもなく、気の弱い人間で普通に疑

問に思っていました。

部落の人間としての自覚

気持ちが変わるのは高校の時です。今は違うのですが尼崎の高校は学力の競争がなくて、その時は総合選抜制というのが尼崎では採用されていて、高校も校区にあって、ほぼ全員が校区内の高校を受験する。その他の公立高校へ行くときには尼崎の学力差があったので、その他へ行くときには同じ試験を受けるのですが、成績の上位５％圏内に入ると校区外の学校に行けると聞いていたように思います。僕はあまり興味がなくて聞いてなかったのですが、だからほとんど受験の競争がないのです。ほぼ校区の子どもが行くのでほとんど勉強もしなかったです。

高校へ行くと部落解放研究会、朝鮮文化研究会、障害者問題研究会というのがあって、差別問題、障害者問題というようなことをする委員会があったのです。当然ながら僕は部落解放研究会に誘われるのです。今までずっと関わってこなかったので行く気はなかったのですけど、ちょっと大人になったのか一回目は顔出しとこと思い１回だけ行ったんです。先輩や先生がいるのですが、そこで偏屈なとこが出て、また合わない人と喧嘩をして行けなくなったのです。行く気もなかったのですけど、１年生、２年生と行かなかったんですね。３年生の時に朝鮮文化研究会の顧問をしている藤原四郎先生という人がいたのです。その先生に引っ張って行かれた形で行きたくないのに行きました。その先生が学校の中では差別問題、同和問題、在日朝鮮人問題を引っ張っている人です。その先生がいるので参加するようになるんですね。そうすると自分が部落の人間だということをしっかり持っていかないと、この先、生きていけないのかなと教えてくれたと言うよりは、つき合っているという感じにさせてくれました。

自分が部落に生まれたことで、自分の直ぐ隣にいる人が在日の人かもしれないし、障害者の人と知り合う事になるかも分からないし、だからそこを、この人在日の人なんですということを知っとかないといけないと言うことを知らしめられました。

先生は通名で通っている生徒には本名を名乗りなさいというんです。名乗れない人とはよく衝突して、それを傍で見ていました。

さっきも戸籍の話をしましたが、韓国の籍名乗っていても、日本籍変えても名乗ってないと、そこは名乗れない。誰かが後で知ることになるということは、どこか不幸なところが出てくるのかなと感じて、自分が何者であるかを知ること、相手が何者であるかを知ることが、きっと大事なことだと思って、先生に共感して３年生になったら通えるようになりました。

差別問題、部落問題に関心のある他の学生とかが頑張っていたので、それを応援するような形で文化祭の出物を考えて、舞台でイチャコラ音頭を踊りました。自分の中では今まで生きてきた中で高校時代は関わりを持った最後の1年間でした。

少しだけ自分が何者であるかということと、部落問題のことが少し分かったと思う時期でした。

学び、働く中で、より学びたくなるということ

大学へ通う動機は病院の相談業務になりたい、社会福祉士を取りたいということですが、福祉社会学とは何かと思うと、習ってい

るとわりと幅が広くて社会学を中心として、心理学・教育学・経済学・医学・看護学は若干ですけど、多岐にわたる学問を学ばないといけないので、１回生、２回生の時から結構カリキュラム組んでめまぐるしく、専門を学ぶ訳でもないけど、一般教養という訳でもないけど、社会福祉士に必要な学問としてここに上がっているだけでも学ばないといけない。福祉社会を学ぶ中で、改革というのが僕には興味深い衝撃を受けた。世の中がどうやって成り立っているのか、社会学で勉強するのですが、理解出来ないし、今でも理解できないです。社会が今どうなっているのか、昔どうやったのか、これから学ぶということを１個１個分析していくのが社会学ですけど多分そこには広く考えると、部落問題も差別問題も出てきて社会の中にもそこには入ってくるわけです。

社会福祉という言葉が曖昧なのでなかなかピンとこないんでこれからもいろいろ勉強しなくてはいけなかったんです。そうしないと福祉というところを実践してだれかを支援するというふうな仕事に就けない。ある一部分を知っていて、そこからその人に対して支援するのではなくて、あらゆる角度、あらゆる立場の視点から、その困っている人に対して支援を行うことが相談業務なのかな、だからこれくらい幅の広い勉強しなくてはいけないのかなぁと思います。もっと専門的に深めたい。社会学とか心理学とか個別にもうちょっと深めたいなと思います。学ぶ機会があればと思います。学問の本を読んでなるほどなあと思い、ちょっと誰かに教えてもらいたい。難しいと思います。

古典から現在に至るので色々な理論があって、その理論をまたこれも多岐にわたるのですが、社会福祉士が学ぶことをカテゴリーに大きく分けると高齢者部分があって、障害者部分があって、児童部分がある。もう少し細かくいくと家族に対する福祉があったり、受刑者に対する福祉であったり、薬物中毒者、ギャンブル依存症とか色んな困ったことを抱えている人に対する支援を行うことのできる人を目指すのが社会福祉士なので大変だと思います。

昔の人から今の人に、歴史、理論の変遷、色んなことが今の社会に繋がり、その理論が生かされて実践に繋がっているのだというのも、今働いてみて半年だけど感じることです。もうちょっと勉強したい、働いてみてやっともう少しそこを知りたいと、またそこを仕事に繋げられると思います。

「差別でないか」と立ち止まって考えること

今日は朝田教育財団の奨学生の集いで、部落についての話になるのかも分かりませんが、社会には色んな立場から差別について大学の講義から差別についてそれぞれ研究者の方から聞かされ、いわゆる部落差別があったり、在日の人に対する差別があったり、障害者のこと、高齢者のことや学歴があったり、色んな差別がある。差別とは何ぞやみたいなこと言うつもりはないけど、何か一つのカテゴリー（範疇・属する位置）を持って、君はこのカテゴリーにいったら何する、もし差別にあったならば、そこには大事なこと、そうでないこと、それぞれこのカテゴリーに入っているがゆえに、世の中で生活しづらい人たちがいっぱいいて、そこの一つに僕は部落に生まれたことが生活しづらい場面に出くわして、そこでどう感じるか。日本に住んでい

て、そこから出て行くと他の民族の方々とは繋がりが持てないところで、多分どこかで何から情報に引っ張られてバイアス（先入観、偏見）が掛かっていることがいっぱいあると思うのですね。自分の生活の中に想像できないカテゴリーの人が多分入ってないと思うのです。そのカテゴリーの人は自分の頭の中に多分いない。出会って初めてそこに盛り込まれてきて、こういう生き方をしている人もいるんだなというふうに思うかもしれない。

関わりを持てなくても電車の隣に座っている人には何かしらカテゴライズされているのかもしれないし、もしくは自分と同じカテゴリーかもしれないし、生活に困っているかも知れないし、ということを考えます。もっと言えば自分が部落であるということを普段は考えないし、そんなこと考えていると何もできなくなる。自分が被差別側の人間だと思ったとしたら、じゃその人は何かにカテゴライズされている人について偏見はないのか、僕はいっぱいあると思います。そのことを、その人たちにぶつけるか、ぶつけないかは別として僕はきっと心の中でいっぱい持っています、偏見はね。どっかから入ってきた情報だし、その情報が正しいかどうかも検証せずに、きっとそうなんだろうという気持ちも持っていると思う。

差別される側とよく話し、学校とかで会議するのですが、それはどっちにもあると思うのです。色んな差別問題を話す場を持ったときには、必ず一方側の話しかしない。差別する側が敵みたいに、きっと一昔前もやっていたし、それに対して糾弾をやっていた、今でもそれは変わらないと思う。そうではなくてもっと広い視野でね、例えば部落の人間だって、広い思いで非常に暮らしにくい人もいれば、そうではない人もいる。障害を持って、一方では社会にはいらない人もいれば、そう思わない人も。障害者自身の人も、もっと自分の力で自立しなければいけない、経済的にも、体の能力的にも自立しなければいけないと思う人もいます。できないことを誰かにやってもらう、それはそれでいいのではないかと様々やと思います。だから色んな差別する側、自分たちも差別しているんではないかと、常にもっていたいと思います。一旦立ち止まってちょっと今偏見持った人もいたな、逆に見られた。何に起因しているのか、何が原因で僕はこの人に対して偏見の感情が出てきたのかということを常に考える。前からそうです。

中学とか高校とか意見がぶつかったのですね。やっぱり大学に入って色んな人たちの、色んな立場の人たちの話を聞くと僕の中ではちょっと自信が出てきた。

もうちょっと世の中が差別をなくそう。それはそれでいいんですけど差別されているんですよということを、それぞれの人が自覚するようになれば、もっと上手くなるような気がします。

間違いなく君は甘いと、差別はそんな甘ちょろいものやないといつも怒られるのですけれども、それが分かっているのです。でも差別されている側に100％表現するよりはお互い持っているとこを出し合っていく方がいいのかなと思います。勉強して身についていないけど、少しは喧嘩になっても負けないくらいになったかなと思います。

自他の生活のしづらさの原因を知ること

偏見というのはどっかであると思うのです。例えば保育所建てると言うと、地域の人が反対して立てられなくなったという自治体が報道された。自分の所に来るのが嫌だ。保育所が足りないとことは皆分かっていて、自分の所にくるのが嫌だ、精神科病院が隣に建つといわれたら、動揺しますよね。特養が来るいわれたらどうですか、嫌ですか、グループホームが来るいわれたらどうですか、嫌ですか。隣の町にあるのだったらいいですよね。単純にそんなことやと思います、偏見というのは。

ゴミ処理場でもいいと思うのです。それは人に対する差別ではなく、自分の回りにあるのは嫌で世の中の何処かにはなくては困るのです。身勝手なことなのです。例えば精神科に通っていますとか、入院経験がありますという報道がいちいち必要かということ。そこは誘導していませんかと思います。もっといったら事件の報道の時に必ず無職、医師、教師等職種が必要ですか。そこにはきっと偏見というかバイアス掛かっている。医師がこんなことする、無職やったら事件おこしても仕方ない。精神科にかかっていたらやりかねない、というふうなこときっと感じると思うのです。それは意図的なのか、昔からそういうルールでやっているのか分からないけれど、僕は感じます。

無職の人が悪いのですか、精神科に通っている人が何か悪いのですか、きっとそれくらいの程度のことを意識しないというか、するっと流してしまうと溜まったものが、カテゴライズされた人たちに対する偏見がずっと入ってしまう。それが当たり前の気がする。それを置き換えると部落の人怖いですかと言われる。中にいる人はそんなことないよと言わはる。

カテゴライズされた人たちが中から発する言葉と回りから持っている人の目とは乖離があって。どんな立場にあるひともきっと皆同じやと思います。

資本主義経済システムでは差別構造がないと成り立たないと昔からいわれていて、その経済システムは今でも変わってなくて、やっぱり差別構造はあり続けるのだということは、それをなくすには経済システムがかわらないといけないということもあるのかも知れない。そんなことは中々できることはない、革命でもおきないと。ではできることは何か、本当に個人レベルの所まで考えると、まず自分が何者であるかを知ること。回りの人が何者であるかを思っているのかを知ること。自分が抱えている生活しづらさを知ること。誰かが生活しづらいかを知ること。原因がどんなことにあるのかと想像すること。そんなことが個人レベルではできる精一杯のことかと思います。それが少しずつ増えていくと、原因も統計的に分析でき、議論で意見をぶつけ合って、結論にたどり着いていくのかと思います。やっぱり一人ひとりが知ること。どんな手立てでもいいから、正しいことを知りたいと想像することが大切だと思います。

これからも時間はかかるがせめて自分の隣にいる人には分かって貰いたい。それで隣の人が分かったことを、また隣の人に分かってもらうことを地道に広げていったら、そのうち理解の入口には到達する。楽観的な思いですが。今日は、僕の差別と関わり方、部落民として生きていくことを改めて考えることができました。

奨学生の近況 2018年度 後期

面談を通して 就活が意欲的になる

M.M

３回生に入り、卒論についてや就職について色んなことを考えなければいけない半年だった。

前期の授業では、講義型の授業より演習型の授業を多く取った。一番私が印象に残った授業は、「ソーシャルビジネス論」という授業である。これは経営についての授業で、グループを組み経営の計画を立て発表をした。今の社会に必要なビジネスを考え、集客や収支計画を立てることの難しさを実感した。

ゼミでは、人間の理性についての発表を行った。私の所属ゼミでは、教授が指定した教科書を買う。その教科書は、社会学のたくさんのテーマが２ページ程度で記載されており、その中から自分の気になったテーマを深めレジュメを作る。私は「理性は野蛮である」という矛盾したタイトルのテーマが気になり深めることにした。内容は簡単に説明すると、18世紀に科学的・合理的に考えていくようになり、世の中がいい方向に向いていくと皆考えた。だが、科学は進歩するにつれて自然を破壊し、人間の理性を利用した大量虐殺が行われた。進歩的な役割を持った理性は、道具と化し、自然を、人間を支配し、破壊してしまった。という内容である。正直これを理解するのに時間がかかったため、納得できるような発表は出来なかった。

後期では、前期でのゼミ発表を踏まえ卒論テーマを固めて行く予定だ。

就職については、学校で面談があり、自分のやりたいこと、現実的に出来ることがとても良く見えた。受けようと決めた企業が３つあり、私の強みを出せそうな企業なため、就活は前向きにできそうだ。面談をするまで、自分の強みややりたいことが曖昧だったため、どのように探すべきなのか分からなかった。就職説明会に行くのも、動きづらいスーツを着るのも億劫だったが、就活が目の前に見え前よりも嫌ではなくなった。さらに、前より貯金、また就活のためアルバイトを頑張ろうと思えた。

（大学 文学部社会学科 ３年生）

現地調査、神社とサブカルチャー

Z.Y

私は、夏季休暇中にフィールドスタディーの調査にて何度か東京に行き、調査対象の神社である神田明神を訪問し、インタービューを行った。調査内容をまとめパネルを製作し大学で行われる学祭にて展示することで前期の単位と認められる。しかし、ただ闇雲に動き適当にまとめるだけでは単位を貰えないので前期の期間を使い一から調査を行う。

ネットや神社について書かれた本などかなりの資料を読み、まとめた。私が、調査していた内容は、サブカルチャーと神社のコラボという事で、神社の歴史などはすぐに見つける事が出来るが、サブカルチャーはまだ誕生して日が浅いので文献や資料が少なく調査に苦労した。この調査を始める前、担当の教授からもサブカルチャーの文献の少なさなどについての助言は戴いていたが、私はサブカルチャーと神社のコラボを調査したく、前年度にも神社ではないがサブカルチャーについての調査をまとめたパネルが学祭にてパネル展示されていたので、このテーマで調査を実施した。サブカルチャーの資料が少ない事は

前述した通りだが、全く無い訳ではなくアニメ、ゲームの情報雑誌など書かれている事がある。しかし、今回調査した神田明神とコラボしていた作品は４年前に終了している、終了後もライブは続いたがそれも２年前が最後のライブだったので、最近の雑誌でも２年前まで遡り探さなくてはならない。このテーマに決めた時点で所持している情報雑誌の内容からまとめる構成を考えていたので、当時、私が所持していた情報雑誌、大学の図書館で貸し出しされていた情報雑誌の内容を上手くまとめられた事に少し安心した。その甲斐あり学祭でパネル展示を行い単位を認められた。

学祭では昨年に引き続き、所属するダンスサークルのサポートと自身が主宰してラップバトルを行った。ダンスサークルではこれまで音響を担当されていた先輩が四回生ということで音響の仕事のほとんどを私が引き継ぐこととなった。音響の仕事ではダンスメンバーが踊る曲の編曲などを行い、学祭でのステージ中はＰＡ（パブリック・アドレス）を担当した。

本番中は細かなミスはあったものの大きなミスは無く無事終えることができた。こちらも去年に引き続き多く方に来てもらうことができ大いに盛り上がっていた。

私が主宰したラップバトルでは、昨年、出場者は私を含め４人しかいなかったが、今年はサイファーと呼ばれるラッパーの集まりで出会ったラッパーに声をかけ出場していただいた。出場者が８人に増え去年より盛り上がるものとなった。

学業、個人とサークルでも今年の学祭は去年に劣らず忙しいものであったが今回は昨年の経験やこれまでの出会いの大切さをより実感できた学祭であったと私は思う。

（大学 人文学部 ３年生）

教育実習に向けて力をつける

N.K

大学に入学してもうすぐで２年が経つ。私は教員になるという夢をかなえるために大学で学んでいる。大学３回生になるにあたって、より専門的な分野を学ぶために、ゼミの志望審査があり、私は吉見憲二准教授ゼミで学ぶことになった。この吉見ゼミでは、毎年、他大学合同の政策研究交流大会に参加しており、ゼミ内でプロジェクトを立ち上げプレゼンテーションを行っている。私は吉見ゼミで学ぶことで、ゼミ受講生が自主的にプロジェクトのテーマを考え、意見を出し合い大勢の前で発表することが経験できるため、教員になるために大きくステップアップしていきたいと考えている。また、私はサークルや部活動に所属していないため、大学生活における先輩がいない。そのため、ゼミで学ぶことによってコミュニティを広げ、同じ教員を目指す先輩や同回生からいろいろと吸収いきたいと考えている。

次に、教職の授業について述べていきたい。教職の授業では、最近生徒による模擬授業が始まり、来年から始まる教育実習に向けて取り組みが進んできている。模擬授業を受けている中で、他の生徒と私では同じ単元でも見る観点が違ったり、授業の展開の仕方が違ったりと参考になることばかりで非常に充実している。しかし、教員になるためにまだまだ専門教科の知識量が足りないないし、小中学生に理解してもらえるような授業展開には程遠いので、これからもいろんなことを吸収して精進していきたい。

最後に、普段の生活について述べていきたい。私は最近、新聞を取り始めた。新聞を毎日見て文章力をつけることや、国内のことや世界で起こっている事件や変化を新聞を読むことでもっと知っていこうと思ったからであ

る。電子機器の発達でどんどん便利になっていく世の中なので、新聞がなくてもスマートフォンなどでも簡単にニュースを知れるのだが、どの事柄も新聞以上には詳しく載っていないので、非常に勉強になる。まだ読み始めたばかりだが、継続することで自分の力にしていきたい。

大学生活も残り半分に近づいてきており、良い環境で学ばせてもらっているので、期待を裏切らないように頑張っていきたい。

（大学 社会学部現代社会学科 ２年生）

「自分の考え」を問い直す

A.R

大学生活も半ばに差し掛かり、慣れと共に忙しい毎日です。生活のほとんどを大学の研究、そしてレポートに費やし、合間を見つけてサークルやアルバイトをしています。大学での勉強は前期より更に実践的な内容になり、理解をすることが大変な内容ばかりです。新しい分野であったり、自分が学んだことのない世界、そして新しい知識であったりと毎日頭の中を整理しないといけません。また、実験では普段私たちが何気なく生活している中で疑問すらもたない「自然の摂理」をよく研究しています。

後期で一番題材が面白かったものは、「加速度gはなぜ9.8なのか、また全世界共通でいいのか」というものです。説明するととても長く理解も大変なので省略しますが、私はこの実験を通して、小学校から高校生までで習ってきた定義や解法はあらゆる実験の結果であると感じました。つまり、定義や解法を学ぶということはその当時「覚える」という行為に等しかったということです。今期の実験を通して、物事を学ぶではなく実感することができたことは非常に有意義だったと思います。

このことを踏まえて、私が今まで考えてきたことや、意見は本当に自分から生まれたものなのかという疑問が生まれました。人は、周りの環境によって性格や人格が変化し、多くの影響を受けます。本当に自分の意見であるか確かめるためにも自分の意見であっても、自分自身に問いかけをし理由を明確にする必要性がある、ということも学ぶことが出来ました。

そしてさらに、人は周りの環境によって性格や人格が変化するということは、他人の考えや思考にも大変影響があるということです。つまり、今現在、差別人権に考えすら持たない人たちに私が私の意見を述べるだけで、その人にも新たな意見が生まれ影響を及ぼします。この流れをひとつ作るだけで、そのあとは二次曲線的に考えをもつ人が増えていきます。私がこの奨学生になったことによって既に循環が生まれ、考えを持つ人が増えてきていると思います。私の考えを友人や先輩に話したり、意見を求めたりしているからです。大学生活はあと２年ですが、これから出会う人にも影響を与えていきたいと思っています。

次に、私生活についてですが、現在私はサークルの幹部を務めています。100人規模のサークルの幹部をやるということはとても責任のあることですが、得られる経験は人生で活かせると考えています。また、アルバイトでも責任のある役になっており勉強面以外でもとても充実した生活を送ることができています。ただ、自分のやりたいことをひたすらに追いかけている状態で、体調を含め家族に心配をたくさんかけているので改善すべきと反省しています。

（大学 理学部機械システム工学 ２年生）

対談集「いま、部落問題を語る」

山本栄子さんが対談集「いま、部落問題を語る」を山本 崇記財団評議員とともに発刊されます。先日、山本 崇記さんから次のような案内をいただきました。皆様にご協力をお願いいたします。

１．プロジェクトの趣旨

京都の被差別部落に生まれた山本栄子さん（1931年生）、その80年の人生を綴った『歩 ― 識字を求め、部落差別と闘いつづける』（2012年）。それは、小学校で強烈な部落差別を受け、文字を覚えることもままならない中で必死に生き、子育てをし、部落問題に取り組む中で、再び、文字と教育を取り戻す母であり女性としての軌跡でした。この本を通じて、多くの出会いが全国の中で生まれました。語りにくい、わかりにくい部落問題に、現場で地道に取り組む当事者がおり、教師がおり、一介の市民がいる。その出会いを生かして、部落問題の最前線について、多様な切り口で縦横無尽に語ってみるような対談集『いま、部落問題を語る』（仮題）を作ろうと2015年よりプロジェクトを開始しました。部落差別解消のヒントを探りたい。そんな思いが詰まっています。

２．プロジェクトメンバーと本の概要

（予定目次）

【仮目次】対談集『いま、部落問題を語る』（仮題）序章　いま、部落問題を語る：新たな出会いを求めて（山本 崇記）　第２章　部落史研究の位置：差別の論理的把握と不断の民主主義革命　対談者：黒川みどり（静岡大学）　第３章　現在の部落認識・差別意識にどう立ち向かうか：同和教育と人権教育の成果と課題を「継承」する　対談者：阿久澤麻理子（大阪市立大学）　第４章　若者と部落問題：生き方の模索と多様なマイノリティへの拡がりへ　対談者：川崎那恵　第５章　隣保館活動の可能性：出会いと繋がりをオーガナイズする　対談者：香川県隣保館連絡協議会事務局　第６章　福知山における識字教室の取り組みと女性たち　対談者：地域女性　第７章　アジアから見る被差別部落　対談者：池亀彩（東京大学）　第８章　京都市における同和行政の「総括」とは何であったのか：新たなまちづくりを見据えて　対談者：淀野実（京都市立芸術大学副理事長）第９章　再論・部落解放運動：差別から「解放」されるとは何か　対談者：山内政夫（柳原銀行記念資料館事務局長）　対談を終えて（山本栄子）

３．スケジュールとしては、

2019年１月　プロジェクト募集期間終了
２月　原稿入稿
３月～５月　校正
６月　校了・最終確認
８月　刊行
９月　リターン発送
10月　出版記念会

４．出版社は生活書院です。

販売予定価格は、2,500円（税込）。Amazon、紀伊国屋書店など、ひろく流通ルートに乗せる予定です。また、各紙・テレビでも紹介されました。前作の『歩』も全くの自己資金で発行しました。今回は、多くの対談者の協力もあり、企画を進めていますが、十分な出版費用の目途がつかず、クラウドファンディングを選択しました。出版の可能性を広げるためにぜひ注目下さい。以下が当該のURLになります。

https://motion-gallery.net/projects/suiheisya100_eikoyamamoto

振替口座番号：００９３０－４－１６４０４
加入者名：京都部落問題研究資料センター

公益財団法人　朝田教育財団

朝田善之助記念館・付属図書室要覧

所　在　地

京都市左京区浄土寺西田町２番地

※第１種低層住居専用地域
都市計画の景観地区
山並み背景美観地区

建　　物

敷地面積　236.58m^2（71.5坪）
延べ床面積　162.92m^2（49.2坪）
構　　造　木造、地上２階
建築物の高さ7.885m
軒高さ5.74m

木構造の特徴

ヒノキの柱と梁（90mm角、長さ３m－４m、1000本ほど）が交叉する３寸角重ね格子梁

環境にやさしい設備

自然エネルギー利用の空調機器

夏季の冷房は、地下水（約15℃）の熱交換により室内空気を冷やす（Well Power System）。

冬季の暖房は、太陽熱を屋根面に集め、屋根庇先から取り入れた屋外空気を暖める（Solar Thermal System）。

高遮熱・断熱ガラス

ペレットストーブ

エレベーター、車椅子用トイレなどを備えたバリアフリー仕様

災害時の協力井戸
（京都市に登録を予定）

災害による断水時に、手押しポンプにより生活用水を近隣住民に確保。

朝田善之助記念館の運営

1．公益財団法人朝田教育財団の事務局
　法人事務・奨学事業等

2．図書室の運営管理
　朝田善之助より寄贈された資料（５万点ほど）の文書･図書などの資料の整理、研究、歴史的・社会的に価値ある資料を保存し、後世の人々に残す。
　資料を公開し、市民・研究者の利用を支援。

図書室　利用案内

○開 館 日　　平日
○開館時間　　午前10時～午後４時
○休 館 日　　土曜日、日曜日、祝日
　　年末年始
　　夏期休業日（別に定める）

研修申し込み方法

1．まずはお電話にてご予約ください。
　この時点では仮予約となります。
　研修申込電話番号　075-751-1171
　※かけ間違いにご注意ください。

2．「朝田善之助記念館　見学・研修申込書」に必要事項を記入の上、送付（ファックス可）してください。 申込書は、当財団から郵送又はファックスすることも可能です、お申し出ください。

注意事項

・団体でのご見学、研修等につきましては必ず事前にご連絡ください。
・電話での予約は仮予約となりますので、必ず申込書をお送りください。
※当施設に駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。
・申込書は当財団ホームページからダウンロードできます。
　Wordバージョン（37KB）
　PDDバージョン（73KB）
　PDFファイルの閲覧には Adobe Reader が必要です。同ソフトがインストールされていない場合には、Adobe 社のサイトから Adobe Reader をダウンロード（無償）してください。

朝田善之助記念館　研修実施

８月23日（木）
京都市立第三錦林小学校

10月15日（月）
京都府山城地域隣保館連絡協議会

11月９日（金）
滋賀県草津市常盤地区
同和教育推進協議会

11月16日（金）
愛媛県人権教育協議会西予支部

11月19日（月）
愛媛県西予市人権対策協議会

研修来館者に、奨学生の推薦をお願いしました

理事　森本　弘義

愛媛県人権教育協議会西予支部　西予市職員・教職員21名が、滋賀県大津市等での全国人権教育研究会を翌日に控え、11月16日（金）朝田善之助記念館に研修に来られました。

初めに、書庫や再現された朝田善之助の居室などを見ていただきました。

その後、以下のようなテーマで研修会を持ちました。

① 朝田善之助の人となり
② 部落差別の基本認識
③ 朝田善之助記念館の概要

特に財団の奨学生事業について詳しくお話ししました。

講師自己紹介の中で、私自身が京都市で小学校教員として活動したこと、同僚などに愛媛出身の教員がいたことをお話ししました。すると会が終わって引率責任者から、朝田善之助初代財団理事長の下で部落解放運動にかかわった山本栄子さんの出演するDVDでこの館について知ったこと、山本さんのことは、京都で教員として活動していた西予市の河野直樹先生から紹介されたとお話がありました。

私自身、河野直樹先生とは、京都市の小学校、特に同和関係校の教員としてともに同和地区の子供たちの学力保障を中心に活動し、また校長としても交流があったことをお話ししました。まったくの奇遇、あるいは人のつながりを感じました。大橋俊有財団二代理事長が京都市教育委員会の教育長だった1964年（昭和39年）、学力向上を至上目標とする同和教育方針を打ち出され、そのもとで京都市の同和教育の取り組みが進められました。河野直樹先生も私もその取り組みの中で教員として知り合いました。改めて、人のつながりを感じました。

研修の中で、財団の奨学生事業についてお話をしました。これまで37年間で74名の奨学生を採用し、今では奨学金の返還金を原資に毎年度の奨学金として貸与できるようになっていること、部落出身学生だけでなく、部落問題解決に寄与する意思を有する学生を奨学生として採用していること、他府県の出身者であっても京都の大学に在学する学生は、奨学生募集に応募することができることを伝え、愛媛県出身で京都の大学に学ぶ学生を推薦していただくようお願いしました。

終了後の参加者アンケートで、「京都大学への進学を希望し学んでいる高校１年生の女子生徒には朝田教育財団を紹介したいと思います。」という言葉をいただきました。

帰りに、お世話をしていただいた引率責任の方に、愛媛県から京都の大学で学ぶ学生を、財団の奨学生として推薦していただくよう再度お願いしました。９月19日（月）には、同じ西予市の人権対策協議会から14名の方が来館されました。

評議員会・理事会

公益財団法人 朝田教育財団の第14回理事会を2018年３月５日(水)に開催し、議案①「2018年度事業計画及び収支予算」、②「特定寄付金『図書施設運営募金』活動の中間報告」、③「７月13日『朝田善之助記念館』完成記念の集い』計画」、④「第11回評議員会の招集」を決議しました。さらに、４月29日朝田善之助記念館完成内覧会、朝田善之助初代理事長を偲ぶ「荊冠の忌」の開催、７月13日第36回同和教育研修会の開催について話し合いました。また、図書館業務準備委員会から報告を受けました。

第11回（2018年度臨時）評議員会は３月24日(土)に開催し、議案①「2018年度事業計画及び収支予算」、②「７月13日『朝田善之助記念館』完成記念の集い」を決議しました。さらに、特定寄付金『図書施設運営募金』活動の中間報告を受け、朝田善之助記念館館長に井本 武美氏を選定した。７月13日第36回同和教育研修会、「朝田善之助記念館開館にあたって」をテーマに竹口 等財団常務理事（京都文教大学教授）に依頼することを計画した。

第15回（2018年度第１回）理事会は2018年６月８日(金)に開催し、議案①「2017年度事業報告および収支決算」②「特別寄付金の受領」③「奨学生の新規採用および貸与奨学金の貸与額」④「第12回（2018年度定時）評議員会の招集」を決議しました。第36回同和教育研修会、朝田善之助記念館完成記念の集いについて確認し、図書館業務準備委員会の報告を受けました。

第12回（2018年度定時）評議員会は６月23日(土)に開催し、議案①「2017年度事業報告及び収支決算」を決議しました。さらに、特別寄付金の受領、奨学生の新規採用および貸与奨学金の貸与額について報告を受けました。

奨学生の新規採用

奨学生志願者の願書・推薦書・部落問題をテーマとした論文（2000字以上）をもとに、奨学生選考委員会における（１次審査）および面接選考（２次選考）を経て６月８日の理事会において2018年度新規採用奨学生を１名決定しました。

朝田教育財団 奨学生 2019年度 募集

朝田教育財団は、**差別のない真に豊かな社会を実現する**ため、1981年に
朝田 善之助（元･部落解放同盟 中央執行委員長）が設立した財団法人です。
公益目的の**奨学事業**として、**部落問題の解決に寄与する意志を有する学生**
などに、**高等教育の就学を支援**しています。

奨学生の種類	1．**大学院奨学生** 2．**大 学 奨 学 生** 3．前各号に準ずる奨学生（ **短期大学生、高等専門学校生**など ）
奨学金の額	次の１または２の額のうち、いずれかを**選択**できます。 1．月額 **５０,０００** 円 （ 年額 **６００,０００** 円 ） 2．月額 **８０,０００** 円 （ 年額 **９６０,０００** 円 ） ただし、その年度の**奨学金予算**および**採用人数**により、 **奨学金の額を減額して採用を決定する**ことがあります。
貸与期間	原則として、**正規の最短修業年限**です。
返還方法	貸与終了後の６カ月を経過した翌月から、**２０年以内**に、 奨学金の全額を**無利息**で返還していただきます。
募集人員	（ 新規採用 ）**若 干 名**
対 象 者 応募資格	**部落出身者** または **部落問題の解決に寄与する意思を有する者**で、 次の１または２に該当する者 1．**京都府内**に（法人本部の）ある**大学院・大学・短期大学・高等専門学校**（独立行政法人 高等専門学校 ４年生以上）に在学している者 2．**京都府を出身地とする者**で、**京都府外**にある**大学院･大学･短期大学･高等専門学校**（1に同じ）に在学している者
応募書類	1．**奨学生願書**（朝田教育財団所定の様式）　　連帯保証人と連署 2．**推　薦　書**（朝田教育財団所定の様式） 大学などの学長、学部長、専攻学科長、指導教授、 高等学校の学校長 もしくは 朝田教育財団役員などによる推薦 3．**在学証明書**（ または 合格証明書 ） 4．**部落問題**をテーマとする**小論文** （ **2000字以上**、Ａ４サイズ原稿用紙 または それに準じた様式 ） このうち「奨学生願書」「推薦書」は朝田教育財団までご請求ください。
参考図書	『**新版 差別と闘いつづけて**』朝田善之助、朝日選書145、朝日新聞出版、1979年
応募締め切り	**2019年４月末日** なお、募集人員に欠員が生じた場合は、その年度途中であっても応募を受け付けます。詳細はお問い合わせください。
選考方法	第１次：書類審査　　第２次：面接審査（2018年５月中下旬ごろ ）
採用通知	**2019年６月下旬ごろ**（ 予定 ）

公益財団法人 朝田教育財団　Asada Educational Foundation
606-8417　京都市左京区浄土寺西田町 2 番地
Office Address　2 Nishida-cho, Jyodoji, Sakyo-ku, Kyoto 606-8417, Japan
Website URL　http://www.asada.or.jp　　E-mail Address　office@asada.or.jp
Phone　075-751-1171　　Fax　075-751-1789